



介護を「個人の課題」から
「みんなの話題」へ。

OPEN CARE
PROJECT AWARD 2023

MS部創設30周年を機に、当院の介護士が
「OPEN CARE PROJECT AWARD 2023」に応募しました。

OPEN CARE PROJECT AWARD 2023

経済産業省が主催。介護を「個人の課題」から「みんなの話題」にするため、エピソードや事例を通じて、よりポジティブな切り口で介護を取り上げ、社会における露出を上げていくとともに、介護の実態を可視化することで、異業種含めて介護をめぐる課題を解決していくことを目指した賞。

「OPEN CARE PROJECT AWARD 2023」に

**MS部職員2名
嘉成光生・後藤あゆみが
入賞しました**

嘉成光生

コメント

私が投稿したエピソードは、利用者さんから「もう死にたいわ」と言われたことを、その言葉をおっしゃった気持ちの裏側を自分なりに読み取り、考えたものでした。そこには「寂しい」「悲しい」「申し訳ない」「楽しくない」という思いがあり、さらに「火として、何かしらの生きがいを持って生きていたい」という意味があると感じています。この気持ちを、ずっと忘れずに利用者さんと向き合っています。



後藤あゆみ

コメント

入賞したエピソードのタイトルは「これ私?」。介護の楽しさや達成感を得られた思い出話です。コロナ禍で外出が難しかった時期に、美容師による、これまでのカットだけでなく、カラーやパーマができる企画に参加して下さった利用者さんが、鏡で自分の姿を見て言われた言葉でした。改めてこのエピソードを思い起こし、利用者さんが自分らしく過ごすことの大切さを考えることができました。

入賞した二人の作品をご紹介します。
次ページからどうぞお読みください。

「もう死にたいわ」

医療法人富田浜病院 介護福祉士
嘉成 光生

「もう死にたいわ」、あなたは目の前の人に言われたことがありますか。

私は介護福祉士として施設で介護の仕事に従事し25年になります。介護は生活を支える仕事ですので、きれいごとだけでは片づけられない場面があります。

それはまだ、経験の浅い3年目の春の日のことです。ある一人の男性利用者さんが「もう死にたいわ」と送迎中の車内でつぶやきました。桜が満開の景色とは真逆の雰囲気をもった言葉に、初めての経験だった事もあり何と言って返せば良いか分からず、何も言えませんでした。私に関わる要介護状態の利用者さんは、何かしらの理由で介護が必要な状態の方で、様々な辛い経験を経て今に至ります。家で暮らしたいという自身の思いとは裏腹に、日常生活で誰かの世話を必要とし、自分一人で服を着替える事も、欲しいと思ったものを買に行く事も叶わない現状に、不安や孤独を抱え日々生きていらっしやいます。社会に出たての私には、想像できない感覚でした。

このようなこともありました。施設入所中の108歳になる女性利用者さんをベッドから起こすために声をかけ体を起こしました。すると突然「寂しくなっちゃった」と泣き顔で訴えられたのです。思わず「大丈夫」とハグをしました。すると先ほどまでの泣き顔はゆっくりと笑顔に変わり、いつもどおり朝食を完食されました。いわゆる介護の専門技術にハグはありません。私が咄嗟にしたことが正解だったかどうか分かりません。それでも体が動いたのは、自分自身不思議な感覚でした。

介護の仕事は、3Kと表現されます。確かにそんな場面もあります。ただ、認知症があったとしても病気を抱えていても、その人生に支え寄り添う事で私と関わったその方が、生きていく喜びを感じ、その一瞬だけでも気持ちが前に向く事ができれば、私にとって何にも代えられない喜びです。そして、寄り添うという事とそれによって得られる喜びは専門職でなくとも、ハグのような誰でもできる仕草や表情や行為などで得ることが出来ます。自分の身近な人のことを想って起こる行為がケアなのではないかと思えます。

「死にたいわ」という言葉をそのまま受け取ると、マイナスな感情に引き込まれそうになりますが、その言葉の裏側には裏腹な感情が閉じ込められていて「生きていたい」と裏返しになっているのかも知れません。

「これ私？」

医療法人富田浜病院 介護福祉士
後藤 あゆみ

コロナウイルスによる感染症が蔓延したことにより、施設に入所している利用者さんは、自由に外出や外泊ができない状況になりました。私たちは、日々を施設内で過ごしている利用者さんに向けて、何かできることはないか考えました。そこで、美容師によるヘアカットを企画しました。コロナ禍になる以前にも美容師によるカットは実施していましたが、今回はカットをするだけでなく、カラーやパーマをメニューに加えることによって、自由な髪型を選択することができるようにしました。

ある利用者さんは、洗面台の鏡に映る自分の姿を見て、「これ私？」と言いました。その方は、自宅にいたときは、美容院に定期的に通って髪を染めて、パーマをあてていました。しかし、施設に入所したため、外出することができず、美容院に通うことができない状況になりました。髪が伸び、白髪の部分が目立つようになりしました。これまで当たり前に行っていた容姿を整えるという行為が出来なくなってしまったのです。そのため、鏡に映る自分の姿を見て、「おばあさんみたい」と、言いながら自分を見つめていました。

美容師による、カラー・パーマを行っているとき、「すごく楽しみやわ」と、美容師さんに言っていました。いつもは、椅子に落ちて座ることができないときがあるのですが、その時は急に立ち上がることもなく、始終穏やかに座っていました。

カラー・パーマが終わり、鏡に映る自分を見たときに、とてもうれしそうに「どう？きれいになったでしょ」と、私に言ってくれました。そのあとも何度も鏡を見て「本当にありがとう」と、涙ぐみながら、お礼を言っていました。その時、「ああ、この企画をしてよかった」と、感じることができました。

自分が利用者さんに対して、何ができるかを考え、それを実行したときの利用者さんの反応がよかったとき、自分の仕事に対する自信につながります。それを積み重ねていくことで、介護をすることの楽しさや達成感を感じることができると思います。そして、それは専門的な技術だけではなく、日常的なちょっとしたきっかけやアイデアで達成できることもたくさんあると思います。その楽しさを共有していくことで、「個人の課題」から「みんなの話題」になっていくのではと感じます。

その楽しさをたくさんスタッフとも共有し、その輪を大きく広げていきたいと思っています。